

昭和四十三年六月十四日 〆講演

「人類の当面する課題」

東京大学教授 衛藤藩吉先生

あなた方の夕方の貴重な時間、一番頭の澄んでいる時間、まだそうではないかも知れないが、いずれ澄むであろう貴重な時間を拝借するのですから、何かいい話をもったのですが、いい話のほとんどは東大でもしているのです、この中に東大生もいると聞いて、とたんに気落ちしてしまつたんです。講義でしゃべつたことが又出てくるんじゃないかと困っているんですが、一人がしゃべることですから、そんなにあちこちで違つた話ができはしないのです。できる人がいれば、それはホラ吹きで、本物の僕は一人しかいないんだから、そんなに違うはずはないのです。だから東大生の中に僕の講義を聞いておられる方がいらして、今日の僕の話の中に「ハハア講義で出て来たと思つたら、また出た」なんて大きな声で笑わないで、黙つて耳をふさいで聞いてらして下さい。

私は「人類の当面する課題」という大きな題をかかげたのですけれど、それは理由があるのです。私、今ここに来て、ベトナム戦争の帰趨がどうであるとか、パリの予備会談がどうなるであろうとか、アメリカの大統領選挙で誰が勝

つであろうとか、あるいは毛沢東がいつ死ぬであろうとか、そういうことを話してきたのではないのですね。そんな予言できないですよ。ケネディーが死ぬのを誰が予言しえたか。誰もできなかつた。いろいろなことを言うのがすきなあの大森実さん（評論家）だつて、そんなことは言つていなかつたんです。だから私が今日お話しするのは、我々が生きていく二十世紀の後半、それから諸君だつたらほとんど大部分は二十一世紀に入る——大部分ですよ——その我々が生きていく時代というのは、人類の有史以来の歴史の中ではどういふふうな特質をもつているかということ、そこから我々はどういふ風な生き方をしたらいいんだろうかということについて、僕なりに考えていることを申し上げてきたんです。だから題は大きいのですが、これから話すのは解りやすい下らないことです。まあくだらないかどうかは諸君が判断してください。しかしわかりやすいことです。

人類が未だかつて持たなかつたもので、今日の我々が持つているものは、普通、三つあるといわれるんですね。一つは核兵器です。もう一

つは猛烈な人口の爆発です。それからもう一つはものすごい技術革新と人間性の問題なんです。このうち核兵器については時間の関係で略します。それよりも、第二の人口爆発の問題と第三の技術革新と人間性の問題とこのことを今日は申し上げさせていただきます。

まず人口爆発のことですが、普通、人口学者は、マルサスをはじめといたしまして、貧困と戦争と飢餓によつて人口が調節されるという風に考えているわけです。ところが、第二次世界大戦という猛烈な戦争の後で、人口は妙な方に行きはじめてのです。というのは先進国では人口は一%前後、北アメリカでもつて一・二%、日本が一・〇%、それから西ヨーロッパと北ヨーロッパが〇・九%位の増率で、それはいいんですけれども、ラテンアメリカ、アジア、アフリカで、大変な人口爆発がおこりだしたのです。それはどうしてかと申しますと、人口というのは、人間の生活程度が一番低い場合、つまり、腹一杯は食えないけどやつと生きていて、そして生きるためには大変な働きがいるという状況の時には、マルサスのいった通りに子供はあ

まりできないのです。江戸時代みたいに、できても間引きしなければならないので、親が生きてのために子供を犠牲にしなければならぬんですね。間引きしないまでも、子供を売りにださなければならぬんです。僕は満州の奉天で生まれて育ったのですけれど、僕が子供の頃には、中国人が子供を売りにきていたのですよ。つい数十年前にはそういうものがあつたわけです。その時は人口は増えないんです。

ところがですね、ちよつと生活程度があがってくると、モリモリ子供を作りだすのです。これはちよつと生活程度があがる、つまり夫婦生活を営むに足る程度の生活はして、それ位のエネルギーはあつて、しかし、他に楽しみがないというような、それ位の状況。それからもつと生活が高まってくると、他に欲望がでてくるのです。まあ、ここは男ばかりのようですから、えげつない表現をするわけですけれども、オツパイを下げたくないとか、それからシワを寄せたくないとか、そういう、子供を作りたいという欲望以外の欲望が出てくるわけです。いつまでも若くありたいという一般的欲望がありません。そうしますと、子供を作らなくなるんです。それに見あうだけの技術革新も行なわれるわけです。そうすると、一九三〇年代のフランスみたいに、人口増率がマイナスになつちやうんです。これはまたそこまでいくと、亡国の兆し

ですがね。まあ日本位に一・〇%位の所で増えているのはまず安全ですが、しかし、諸君が五十位のいいオッサンになって、年頃の娘をかかえた時には、娘はそうはいわないかもしれないね。私、子供は絶対生まないわ、そういう風に変つちやうかも知れない。諸君が、今、両親をいじめているように、あなた方は娘たちから猛烈にいじめられるかもしれない。ぼやぼやしていると、必ず来ますよ。人間の社会というのは、いい意味でも悪い意味でも自分達で作るのですからね。あなた方が三十年後のことを考えないで行動していると、三十年後にそれがあなた方にふりかかってくると、まあそういうことです。

まあそれは大した問題ではないのですが、人口爆発の方の問題は、人間が生まれてくると、必ず食べるわけですよ。だから食糧生産がそれに見合わなければ、うまくいかないわけです。今までは幸いにして先進国の猛烈な農業生産物の蓄積があつたために、たとえばアメリカ等はものすごい小麦の蓄積量を持っていたために、戦後の飢餓はそういう先進国の小麦とか、とうもろこしで補うことができたのです。たとえばあなた方は全然知らないだろうけれど、御両親たちは昭和二十年、二十一年頃には、アメリカの豚が食うトウモロコシでもって生き永らえて、そしてあなた方を育んできたわけです。

今だったらとてもあなた方が見向きもしないようなもので生きてたわけです。僕でさえサツマイモで生きていたのだから。

そういう風にして、今までは先進国のものすごい備蓄でもって食ってきたけれど、今度、先進国の備蓄がそろそろ尽きました。そして依然として、人口増はここ十年間でもって世界平均は一・八%です。一・八%ということは、今世界人口は三十二億ですから、二十年後には六十億になるわけです。それに見合うだけの食物がでなければならぬ。それでなければ大変な発明が行なわれなければならぬ。たとえば、空気からおいしいビフテキをつくるとかいう発明がなされなければなりません。そういう変な発明がなされないと、どうしても農業革命がなされなければならぬ。この問題がおこってくるのです。ところがこの農業生産力を増やすというのは、そううまく具合にはいかないんです。世界で、日本の農業の明治以来の発展は奇跡といわれているんです。どうして奇跡かという、四十年間に倍増させたのです。そのためには沢山の名もない農業試験所の人たちが血の流すような勉強を重ねて、あるいはお百姓さん達が新しい農耕法を受け入れるため、大変な苦勞をし、それから耕地整理をするために大変な争いをし、そして四十年間に倍増させたのです。ところが四十年間で倍増するという

のは、これは複利計算にするとというと、一年平均一・七九%の増です。つまり農業平均を年平均一・七%に保つことは、それほど困難なことなんです。そのために無名の人々が沢山、血の出るような仕事や勉強をしたりしてやっとなって来るのです。あなた方に想像のできない苦労を戦前の日本の農業はしているわけです。たとえば僕の伯父は福島県のごく普通の自作農ですけれども、戦前の農業の麦刈り、稲刈り、田植えの時にお嫁さんは眠るひまがないから、麦を刈りながら寝たというのですね。諸君、そんな努力をしたことがありますか。ないだろうと思うのです。僕も戦後なんですよ、昭和二十三年位からなんです。

昔、あなた方よりまだ若かった十五、六の頃ですが、僕は『福翁自伝』を読みまして、その中に、緒方洪庵の寮で勉強していた時に、ふと気がついたら枕がない。どうしてかというのと、自分が机に向かって勉強して疲れると、ボタンとたおれてそのまま寝るんですね。そして目が覚めると、また起きて勉強していたから、枕が必要なかったということが書いてあるのを、御記憶の方もあるでしょう。それで感激しましてね、僕もやろうと思わしてね、母さんに、枕はもういらんといひましてね、それから机にむかってみたんですが、これはできませんね、できませんでした。それから旧制の高校の寄宿寮

にいる頃、一日六時間しか寝ないでいてやろうと思ったのですが、ずいぶんがんばったが、これもとうとうできませんでした。だから僕はごく平凡な人間だと自分で思っておりましたが、しかし、その極く平凡なお百姓さんでも、そういう風に忙しい時は寝るひまもなく、畑の中でしゃがみこんだまま麦刈りの中で居眠りをするのが精一杯だと、そういう生活を強いられてきたわけです。そういう風にしてあの集約農業が支えられてきたわけです。それで日本はやつと四十年間で倍増させてるわけです。

それではこれから三何年間の間に農業生産を倍増するにはどうやったらいいのか。しかも倍増では追いつかないということなんです。いま三十二億で、紀元二千年に人口が約二倍になるんですが、それがみんな食うんですから、倍では追いつかない。どうしてかという、現在、我々と一緒に生きてる三十二億の三分の二というものが、栄養不良や栄養失調になっているんです。これは日本みたいな豊かな国に比べると考えられないですよ。日本みたいに豊かな国という、あなた方の中には、ふくれて、俺は貧乏だ、俺の小づかいは月二千円だということかも知れませんが、現実には我々の日常生活をみてみても、第一あなた方、服装が白くてきれいだもの。もし本当にあなた方が栄養失調の状態にあるならば、Yシャツの洗濯よりも食べ

る方に金を廻すでしょうから。現実にはあなた方は白いシャツを着ているし、私も二日に一度はこのシャツを替えています。ということは、これはやっぱり我々はある程度食っているということなんです。もつとも、統計のとり方によつては、多少変わってくるんです。日本人というのは澱粉質を非常に好むのです。お昼などもりそば二杯、大ざるなんていうことになる、カロリー計算でゆくと比較的低いんです。そのためにもまだ栄養不良の奴がいるぞという統計が出かねないのですが、それはさておいて、あなた方はまずまずラーメンを食おうと思えばラーメン、天井なら天井を食えるし、そういう意味でいえば、世界の人口でいうならば残りの三分の一にはいることは間違いないんです。そうするとどうしても、食料の増率一・八%以上にもつていかなければ、紀元二千年頃には沢山の飢える人間がでてくるということには、これは否定できないことですね。これが第一の問題なのです。だから我々は何かしなければならぬ。何をするかといえは、まず人口爆発を抑えること、これはまあ一つは、食いの方法を。それからもう一つは、食いのものを何とかして増やすことと、そういうことになるわけです。

ここらで第三の技術革新と人間性の問題に移りますが、今日はものすごく知識の量の増え

ている時代なのです。それは加速度的に増えているのです。科学の出版物を計算した人がいるのですが、有史以来一九五〇年までに出版された科学の本は一九五〇〜一九六四の十四年間に出版された科学の出版物とは、総量が同じだということです。ということは、あなた方みたいに知識労働をする場合には、ものすごく勉強しなければ技術革新についていけないということなんです。僕の場合も同じです。昔の小説たとえば森鷗外の『青年』とか『小倉日記』といった小説などを読むと、あの明治の一代の秀才が、『小倉』の例でいうならば、三時、四時頃、軍医ですから馬で帰ってくると、あと暇でしようがないから、フランス語を勉強してたでしょう、そして夜は小説書いていて、それで当代一流の小説家になったわけですね。それからあなた方の中に医者になられる方がいるかも知れないですけど、皮膚科の方でもうお亡くなりになったけども、「太田」という超一流のお医者さんが戦前おられたんですが、この方は木下左太郎というペンネームで、美術評論家としても一流の人だったんですね。さっきの福沢論吉のと矛盾するみたいですけど、一旦学者になつてしまい、あるレベルに達すると、あとは世界の趨勢についていくのは割合楽だった。今はそうはいかないですよ。あなた方は一生勉強しつづけなければいけないんですね。それが嫌だ

つたら大学を止めた方がいい。そしてもつと別な生活をした方がいい。どうしてかという猛烈な技術革新の結果、どういう状況がおこってくるかという、技術革新の果実をエンジョイする大量のグループと、それから技術革新を自ら作りだすエンジニアだとか、管理職にある人だとか、そういう二グループに別れるのです。そして片一方の、ものを作る方は、もう超過勤務だとか何とか、そんなこと問題外で徹夜しても技術革新についていかなければならぬのです。ところがその技術革新の果実を楽しむ方は、機械がものを作るのでしょ。自分は定められた部署でもつて、ボーツと機械をみていればいいのでしょ。あるいはタクシの運転手なんて勤務時間が終わってしまえば、グググッと車洗ってあとは家に帰ってボーツと寝てしまえばいいのです。タクシの運転手が日々これ新しい技術をマスターしなければならぬかという、そんなことはないでしょう。だから、多数の、安易な労働で豊かな生活を楽しむグループと、少数の一生働きつづけなければならぬ奴とに別れるわけです。大学に入ったということ、あなた方が自ら作りだすグループに望んでなつたわけだと思つたのです。それだつたら日本だけ見ていたら駄目で、世界を見てみますと、そうするものすごい知識の量が増加するのですよ。そいつを消化するだけで、大変な

ことだということがおわかりになると思うのです。それでそういう風な時代なんですけど、ここで問題がでてくるのです。それで技術の革新は人間に幸福をもたらすでしょうか、こいつがわからないんですね。僕なんか技術革新に遅れまいと思つているものだから、オタオタしているでしょ。ところがカンボジアのプノンペンの郊外に僕は行ったのですが、そうするとはだしてオンボロの服を着たクメール人のお百姓がいる。ところが彼等は水田がそのへんにポチポチあって、そこで日本から見れば大変におそまつな稲がホロホロ生えているんですね、けれども、うしろの池にいきましたと、何かしらないけれどアミをゴチョゴチョ五分ぐらいひきまわしていてポンとあげると、お魚がひっかかっているんですね。僕がお魚一匹、たとえば鯉一匹どの位するか、まあ千五百円位だとすると、僕が千五百円をかせぎだすためには、僕の給料でいえば何時間働かなければならないか。おそらく二時間以上働かなければならない。ところが奴さんは五分働いただけで同じものを獲得した。水田はもう稲を植えておけば、ホロホロつて生えて何となく米がとれる。そして太古蒙昧の状況ですけど、非常に牧歌的なんですね。顔つき見たつて、あなた方みたいに、そんなにいきりたつていない。僕の顔もいきりたつていますけど、こうボー

とした顔をしている。こんなところで「先生、先生」といわれている僕と、それからプノンペン郊外のお百姓さんと、一体どっちが本当の意味で幸福をもっているだろうか、僕はつくづく考えこんでしまいました。そういう風な考え込ませる風景というのを僕はいたる所でみました。タシケントでも、ラオスでも、キプロスでもみだし、そうすると技術革新が幸福をもたらすかどうかということは、僕達わからないですね。

ただ、これだけがわかつているのです。技術革新というのは、これは坂をころがり出した車みたいなものであって、一旦加速度がついたら、これは止められないということです。あなた方が、「ようし俺はこの世界から隠遁するんだ」といって、ヨガかなにかでどこかで、どうにかしようと思っても、これは駄目なんだ。あなた方の中にサマセット・モームの『レザース・エッジ』というのをお読みになった方がいられるでしょうが、『かみそりの刃』原文で読んでもやさしいものですが、あの中に一九二〇年、ものすごい物質文明を厭った一人の良心的なアメリカの青年が、インドの果てまで真理を求めようとして求められない、というのが出てますが、我々は技術革新からも離れ去ることはできないのです。悪女に慕われた男性みたいなもので、これはもうどうにもならない。後はも

う悪女を悪女でないようにしなければならぬ。つまり技術革新の中でもって人間性のあるような社会を自分でもって作り出していくより他しようがないと思うのですよ。

ところが問題が多いのです。これが我々が人類史の中で直面した大問題なのです。デニス・ガポールというイギリスの電子工学の大家が、人類が負っている三つの課題としてですね、核兵器と、人口爆発と、先進国における人間のレジャー時間のもて余しと、この三つをあげまして、この時間をもて余しているという問題だけは、どうしようもないというのです。核兵器も、人口爆発も、人間の知恵でどうにか解決できるメドがたつのでありますけども、ところがレジヤの問題だけはどう解決していいかわからないと嘆声をあげているのです。実はその技術革新の結果として、ものすごい余った時間というものがでてくるわけです。つまり先程申し上げたように、少数の人間というのは、これはもう全く時間がないわけです。それでもヒイヒイって勉強し働いているわけですが、大量の人間というのは、所得はどんどんふえていって、日本では今年一人当りの所得が九百米ドル越しますですよ。千米ドルに達するかもしれないですね。しかし、紀元二千年になると他の条件が等しければ、今のままのびていくと、一人当たり六千米ドル位になるのです。うまくいくと

七千米ドル位になる。そうしますとあなた方の息子が、二台目のスポーツカー買ってくれと、赤いスポーツカーでは、なんとか子ちゃんが嫌だといったと。アハハってあなた方、のんきそうに口を開いて笑ってらっしゃるけど、僕が三十年後が見えるんですよ。そうすると白髪の生えたあなた方が嫌な顔をして、ああ今どきの若いものの気持はわからん。俺が若い頃は和敬塾でこんなに勉強しとったのに……なんていうことになると思うのです。それからトンカツなんて、和敬塾で出るようなトンカツを夕飯で出したら、そしたら娘や息子達が、チエツこんなトンカツ……、まあ確実にこんな風になる。他の条件において等しければですね。そうするとあなた方の奥さんがですね、嫌な顔して、そんなこといわずにおあがりという。するといやだ、こんなの、スエヒロのビフテキじゃなきゃ嫌だと、そういうことをいうんですね。そして、あつ、これからスエヒロに行こうなんていって、それからスポーツカーで、ピーといくのを止めえない。そういう風になるのです。つまり、あなた方のスネは僕達のより太るわけです。しかも大多数の人間は労働時間はますます減っていくわけです。いまでさえ四十八時間労働というのは四十時間労働になっていくでしょ、もうすぐ土曜日が休みになりますよ。週休二日になる。

このままの調子で労働時間が減っていったら、だいたい一週間に三十五時間労働すればいいようになるですよ。で一日に七時間労働すればよくなるわけです。朝九時にでていって、そして四時に帰ってくればいいのです。後の時間どうする。テレビ見て長嶋がどうだの、金田がどうのといつても、これはもうあきますよ。二十年間プロ野球に熱中しても、これは必ずあきます。今度はプロサッカーか、そのうちもつと刺激を求めて、そのうちローマ帝国の末期みたいになるかも知れない。親父がそんな様だから、息子はますますそうですよ。親のスネをかじつてもかじつても、六千米ドルですからね。かじり切れませんか。そのうち息子の癖に十七、八でもって結婚するから、一軒家を買ってくれ、一千万円のマンションを買ってくれないでいうことになる。そうすると、親の方も時間をもて余す。息子も時間をもて余す。娘も時間をもて余す。そういう時代が来るんですね。こういう話をしていると、あなた方は、何を言うと、俺の家は貧しくて、俺はアルバイトでヒーヒーいっているんだと。本当は和敬塾かなんか飛び出したけれども、安いから我慢しているんだと。まあこれは冗談ですけど、まあそういう風な反論を心の中でしてらっしゃる方がいらつしやるかも知れないですね。私は平均値をいつているのです。あなた方だって、率

直にいつて、夜、新宿に行つて、そしてあのへんでウロウロしている青年をこらんなつたら、やつぱり嫌悪感を催すでしょう。こいつら何してるんだろ。俺はわからないインテグラル（積分）だとかに取りくんでいるのに、とやつかみも半分あつてですね、とにかくあなた方だつて嫌悪感を催すと思うのです。僕の息子は高等学校の三年ですけど、猛烈にそういうものに対して嫌悪感を催しますね。だから必ずそういう気持ちがあるだろうと思います。しかしそれは決して彼等が悪いのではないのです。ウロウロしている奴等はこういう風に生活していいかわからないのですよ。あなた方は生きがいのある生活について、ほぼメドがついているからこうして勉強しておられると思うのです。そういう風にわからん奴は沢山いるわけです。そしてわからんでも生きられるんですね。

これからの社会は、そこが問題なのです。それで僕は思うのですよ。ローマ帝国の末期みたいに富が蓄積されていつて、遊民が一杯できてきた国は、必ず滅びます。あなた方の中にプロイセンの十八世紀の歴史家でニーブルという人の名前ぐらいお聞きになつた方はいらつしやると思いますが、ニーブルが「自殺に依らずして滅び去つた国民はない」といつているのですが、これは名言ですね。彼はローマ史の大家なんです、彼が生きていた時代というのは、プロイセンはナポレオンのもとで蹂躪されていた時代なのです。あの素朴で質素でよく働いた、地中海沿岸をずっと征服したローマでさえも、富がそこに集中し、奴隷がものを生産してくれるようになる、そうすると遊びだしたのです。時間が余つてしかたがなくて。そしてシエンキエビッチの『クオ・ヴァ・デイス』という小説の中に出てくるような場面がでてくるのです。この本は是非お読み下さい。シエンキエビッチというポーランドの作家の書いた「いずこに行きたもう」というラテン語「クオ・ヴァ・デイス」という本です。文庫で出ている。木村毅さん、この間ここにこられたと思いますが、あの人が若い頃に訳されたはずですが、話を元にもどして、だから我々はもし自分の生活がそういう風に豊かになつたならば、国をあげて作り出す方に入らなければいけないのではないかと思うのです。これはもう国をあげて果実をエンジョイする方に廻つたら、僕は死ぬからいいけれども、必ず諸君が苦勞しますよ。年寄りになつてヨイヨイになつているのに、あなた方の子供達がちつとも働かないものから、日本にちつとも食いのがなくなる。そうすると年寄りは一番後廻しになりますよ。本当にまじめな話。それでございますから、国をあげて作る方に廻らうではないかというのが今日の僕の話になるのです。皆さんに対する呼

びかけなんですけども。

じゃあ作りだす方になるというのはどういうことなのかということですけども、食い物が足りなくなるというのは、これはもうアジア、アフリカでは歴然としてるわけですよ。なぜ食いのものが足りなくなるのかというと、率直にいうと、連中、さっきのクメール人の農業じゃないですけど、働かないからですよ。インドは飢饉の国です。ここ三年間でも飢饉で非常に苦しんでいる国ですけども、そこにインドが独立してすぐ日本は那須先生という農学の大家を大使として送ったのです。これは吉田政府のしたかといふと、農業専門家ですから、これは大変だといふので、こんななまけものの農民じゃ、これはかなわんと。何がいかというと、日本の農民をつれてきてですね、日本の農法でやると、これだけのができてくるんだということを見せようということだったので、四カ所、日本の農業センターを日本のお金で作られたんです。そこにあなた方と同じような青年が行って働いている。現地は熱帯ですから、日本の温帯農法の青年、熱帯農法になれていない青年が行って、たちまち四倍近く、現地の四倍ができたのです。それでも農業センターができて五年もたつのですが、それなのにまだインドでは、なる程あれだけ働けばいいのだという気持が起

つていません。だけどこれを十年続けると変わるかも知れないね。今インドの農民は、あんなに働けばあれ位できるのは当然だといって、自分の村に帰って今までと同じようにやっているんですね。だけどあんなに働けばあんなにできるんだから俺も働こうという気持ちにいつかはなるかも知れないですね。それまで我々は忍耐強く待つんですね。これは大変いい仕事だと思ふのです。それから那須大使はもう一つ、救済センターを作ったですよ。インドというのはライ病がものすごく多いですよ。これも日本政府のお金でライ病を救済センターを作られ、それで御承知のように宮崎松吉先生を始めとする日本のお医者が出て、ライ病の手当をされている。宮崎博士などは、今、日本にいれば孫の手でも引く張ってそのへんをウロウロしてどうやって時間をつぶすかといった老人ですよ。もうこんなおじいさんのお医者さんなんか頼る人はいないでしょう。バリバリ働く、自家用車なんかを運転するお医者さんがいるんだから。しかも、あの方はライ治療一途に暮らしてきた方ですから、日本ではもうライ病がグーと減っちゃったら自分の専門はないわけですよ。そういう方があの老齢でインドに行かれて、そしてやっておられるわけですね。

それでまああなた方にしても僕達にしても、そういう意味で東南アジアとかアフリカを眺

めればですね、自分の分から作り出す、そういう役割というのは、いたる所にころがっている。たとえば僕だって去年までは香港にいたっていいのですが、香港に行く時だって、僕の同僚は止めたのですよ。というのは、僕はその時プリンス頓大学から招待状が来ていたのですからね。一年間来いって。待遇はものすごくいいんです。四カ月でもって八千ドルですわね。だから日本と比較すれば、ものすごくいいですね。それを断わって香港に行きましたが、皆どうして香港なんかに行くんだって止めましたよね。だけど僕はもうアメリカを知っているし、アメリカで楽な生活をするよりも、香港で中国語にもう一回磨きをかけて中国人と一緒に生活した方がいいと思つたから。だけど僕はもう年を取りまして、せいぜいそれぐらいのことです。これからだってインデアン・スクール・オブ・インターナショナル・スタディズというニューデリーにある学校がありますが、そういう所からでも招待状でもあれば、また行こうと思いません。だけどあなた方だったら、することはいくつでもありますね。そういう意味で日本だけみていると、何かおもしろいことないかということになるんですけども、世界全体をごらんになれば、あなた方がいかに恵まれているか、そして、恵まれたが故に負わされた自分の義務、社会的な責任というのは何だろうかということをお

考えになれるかと思うのです。

実はフランスでも学生運動が、ドイツでも日本でも、とこういう現象を我々はどのような風に考えているかと申しますと、これは、あなた方にお気に召さない分析かも知れないが、これはヒマがあるからです。あなた方は四十年前に生まれていたら、あなた方の大部分は大学に入ることができなくて、もうとつくに十七、八で労働市場に放り出されていると思います。労働者として労働を売って働かなければならない。そうしたら、大きな立て看板を書くヒマなんかありません。自分のその日その日の飯をかせぎだすために、大変な努力をしなければなりません。フランスもそうです。彼等もヒマがあるからです。アメリカでもそうです。アメリカの大学の人口は四百万です。そのうちの半分程は働きながら大学にいられますが、残りの二百万は大学生です。これがまた、時間をもて余し、しかも生きがいがないわけです。一九二〇年代のドイツと同じで、一体俺の生きがいは何だろうかといって求めている。そうすると一番生きがいのある仕事といったら、現在確立している権威をぶち壊すことです。こんな面白いことはない。世の中にぶっ壊す程、面白いことはないです。だけどぶっ壊した後でどうするつもりなのかということになると、建設のプログラムにいたってはなにもないでしょう。だから我々の

分析によれば、これもレジャーのなせる業だということになるわけですね。だから技術革新はそのまま人間を幸福にするわけではなく、技術革新が人間の幸福とつながるようにするためには、主体的に我々がこれという生きがいを見つけていかなければならないわけです。その問題を私は今日あなた方に投げかけたのです。

もう少し具体的な、東南アジアにいつている、少数ではあるが、非常に尊敬されている日本の青年の話をしたかったのですが、時間がきたので、このへんで止めておきます。実は僕も一体あなた方のために生きがいを見いだすのにどうすればいいのかということ教師の立場から苦慮しているのですが、君達も考えていただきたいと思うのです。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。